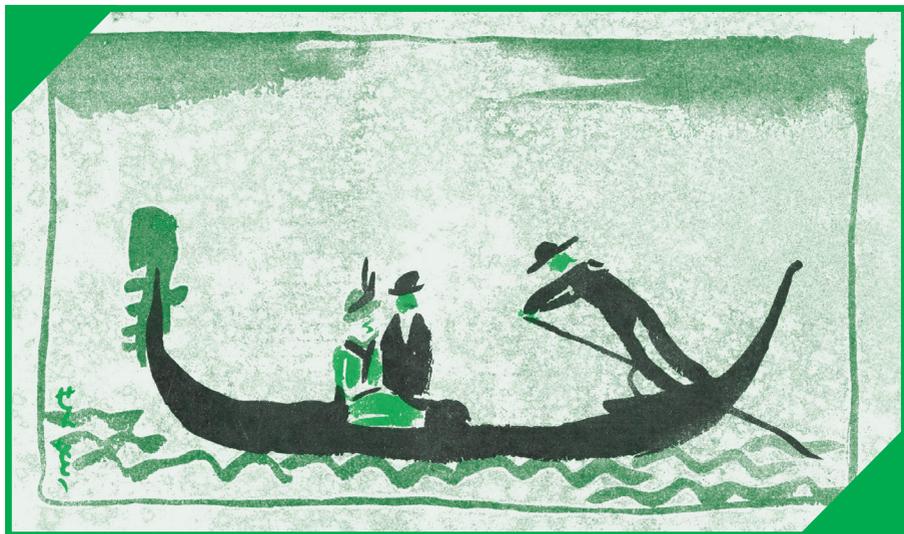


詠 詠 集

九 月 号



花鳥詠詠

9月号 (426号)

日本伝統俳句協会

花鳥諷詠[®]

令和5年9月 ■ 第426号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	今橋真理子 2
	山西 商平 4

この人の作品	片岡 橙更 7
--------------	---------------

一頁の鑑賞	鈴木 風虎 8
	前北かおる 9

卯浪	10
----------	----

虚子研究 『六百五十句』研究 (43)	11
---------------------------	----

日本伝統俳句協会総会シンポジウム

「若手俳人にとっての虚子一俳句の『共生』を考える」	前北かおる 17
------------------------------------	----------------

新刊紹介	24
------------	----

風報	26
----------	----

令和六年（2024年）俳句カレンダー募集句入選者	28
--------------------------------	----

地区行事開催日程表	31
-----------------	----

編集後記	32
------------	----

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 「ホトトギス」大正4年6月号より。小川千鶴画「ごんどら」。

花鳥諷詠選集

今橋眞理子 選

入選六十句

特選五句

暮れてなほ空を切る影親燕

宝塚二瓶 美奈子

揚花火空に吞まれてから開く

西予末光 惠美子

草笛の鳴りてくちびる震へけり

三木松本 幸平

母の日や思ひ出畳み青海波

下関貞包 清子

捌く手の弾んでをりし初鰹

大牟田 鹿子生 憲二

二句短評

一句目——人の暮らしのすぐそばで子育てする親燕。まさに「空を切る」という表現のままに、巢に戻る時、もゆく時もまっしぐらである。夕刻の空に影となって飛び交う親燕の懸命な姿に憐憫の情を誘われる。

二句目——揚花火は点火されて空中に上がった火玉が、空に消えたかと思う一瞬の後、夜空に花開く。「空に吞まれて」とまるでスローモーションで見ているような描き方で焦点を絞り、その瞬間が巧みに捉えられている。

葉桜の風の加勢や弓を引く 西脇 岸本 悦子
 咲き切つて風の重たき牡丹かな 福岡 馬場 紀子
 花水木風まつすぐに新駅へ 堺 杉山千恵子
 青嵐牧の匂ひも縋ひまぜて 福岡 山口 裕子
 地下鉄の出口迷ひて夕薄暑 羽生 折原 秀子
 濁りなき流れとなりて五月晴 四国中 豊田 耕造
 手をさするだけの見舞や桐の花 福岡 島原 仁代
 長考の扇をたたみ席につく 福島 坂野 洋三
 到来の枇杷に思ひ出滴りぬ 東京 甲斐瑠璃子
 高下駄の音遊ばせて水を打つ 伊万里 萩原 豊彦
 落ちし子に鳴き続けをり親雀 山形 秋山 廣子
 黒髪 of 佳人の計報額の花 徳島 奥村 里
 白こその翳りありけり花菖蒲 羽生 塩田 章子
 洛中のひたすら夜を待つ暑さ 京都 本谷眞治郎
 ふるさとを出でず仕舞ひに粽結ぶ 南国 高橋 以登

あとになり先になりして田植かな 高松 多田てい子
 菜の花に溺るるやうに子ら遊ぶ 香川 柴田 禮美
 風炉置いて一人の暮し雨の音 始良 五反田加代
 草取や無心の作務となる朝 洲本 高野 さち
 穴子食ぶ瀬戸大橋の見ゆる席 神戸 玉手のり子
 大漁や浅瀬に傾ぎ若布刈舟 加賀 堀口 紀子
 病室の窓全開や祭笛 神戸 岩水ひとみ
 日覆の数だけ浜の小商ひ 岡山 岩崎 正子
 息しても飛びさうな種蒔いてをり 高松 久本 照代
 近松の西鶴の町夏暖簾 泉大津 山田 佳音
 切れ目なき万緑つづり行く能登路 輪島 向 佐ち子
 行く先の定まれるかに山の蟻 米子 中村 襄介
 翡翠の一閃濠の昏さ裂く 岡山 名木田純子
 一声のあと長き黙ほととぎす 鹿児島 松永 素子
 あぢさるの白にまぶしさありにけり 水戸 相澤 正明

島一つ呑み込んでゆく卯浪かな 尾鷲 若林 証矢
 路地薄暑むかし床屋と煙草屋と 大牟田 岩永美智子
 新調の子供神輿の声弾む 天童 村形 嵩子
 只ならぬ夜の暗さや梅雨出水 高知 森脇 杏花
 句心に纏はりつきし藪蚊かな 鳥取 宮脇 典子
 教室の軽くなりたる更衣 静岡 小泉 荒太
 水郷の水より明けてほととぎす 大牟田 石橋 武子
 広すぎる空にも慣れて燕の子 熊本 西村 孝子
 十葉の広がる庭や雨上り 南砺 有川 寛
 やはらかく石をとらへて歩く蟹 八代 山下さと子
 新緑の光となつてゆく葉擦れ 八代 山下しげ人
 嫁ぐ娘と並べし枕明易し 神戸 長谷 元子
 螢飛ぶ聞ひろくと水の上 綾瀬 鈴木智香子
 翡翠の瑠璃滴らす水しぶき 熊本 尾玉 胡餅
 晩学の吾によき師や松の花 岡山 大野 文子

● 山西商平選

特選五句

黒髪の佳人の訃報額の花

徳島 奥村

里

夕桜心足らひし一日旅

福山 佐藤 浩子

子

温泉宿古り籐椅子も古り湖を見る

小樽 遠藤 嶺子

子

すと立てし漢の小指祭笛

川崎 飯川 三無

無

更衣ふはり時間の動き出す

吹田 北上 美佐子

子

二句短評

一句目——「黒髪の佳人」、物語の登場人物を想わせるこの華麗妖艶な措辞。「額の花」の可憐清楚な佇まいとその移ろいの哀しさ。作者がこの取り合わせに託された故人への深い追懐と追悼の念にすぎり、悦子様を偲ばせていただきました。

二句目——「一日」と「旅」に短い切れを挿んで「旅にしあれば」の感慨として読みたくなりました。「心足らひし」。さまざまなことを包み込んで心豊かなこの和語に過ぎる花褒め旅褒めの言の葉は見つかりません。「夕桜」に心残して。

祖父母より父母より生きて蝸牛	神戸	三木	雅子
車椅子頼りの暮し梅雨に入る	萩	河野	祐子
宍道湖の夕さざなみに解く薄暑	倉敷	中田	鈴江
私にもまだある未来雲の峰	佐賀	古庄	たみ子
老鷺の声を映すや鏡池	長崎	植村	華文
読みかけの頁の重く梅雨深し	伊賀	子日	康子
川音の闇へ踏み入る蛍狩	伊賀	永井	二紗子
今朝はまだ早苗の向きの定まらず	日進	岩田	全充
虫干や遺品の中に竹とんぼ	千葉	吉澤	かな尾
はにかみを添へて息子のカーネーション	浜田	三沢	孝子
子つばめの心もとなき宙返り	大阪	小玉	ヒロ子
ががんばの飛ぶには余る長き脚	高知	大川	房子
粒硬く日を跳ね返し青葡萄	東京	飯島	千青
神々の山を遠くに田植かな	札幌	増田	植歌
玄海を銀河の帯の移りゆく	神戸	田中	あかね

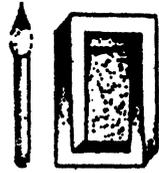
入選六十句

夏草の猛ける速さの昨日今日名古屋 藤井 裕子
墳丘を守る一村若葉風高松 小林美智子
川多き手古奈の里やつばくらめ越前 藤田 豊子
葉桜の風の加勢や弓を引く西脇 岸本 悦子
花水木風まつすぐに新駅へ堺 杉山千恵子
教室を明るくしたる更衣金沢 荒谷みえ子
遺跡野の太古の息吹蓮蕾む泉大津 多田羅紀子
薔薇園の真ん中に居て海を見る高松 金澤 正恵
洛中のひたすら夜を待つ暑さ京都 本谷眞治郎
寡黙なることも涼しきおもてなし福岡 黒田 純子
葉を添へて初物といふ枇杷を売る徳島 吉田 有子
信号を渡りきつたり姫女菀高松 福家 敬子
こんなにも余生は永し古茶旨し福岡 下原口允子
さくらんぼ姉には甘き父なりき神戸 平田 恵
吾よりも遠出したがる夏帽子長岡京 藤堂くにを

娘とあれば新茶ひとりの午後を古茶鹿児島 永井 紀子
捌く手の弾んでをりし初鯉大牟田 鹿子生憲二
夏空を揺さ振るやうに地震襲ふ珠洲 松本 寿憲
古いぬればなほ身ざれいに更衣大阪 山内 繭彦
山法師白に始まる森の詩神戸 涌羅 由美
日覆の数だけ浜の小商ひ岡山 岩崎 正子
近松の西鶴の町夏暖簾泉大津 山田 佳音
雲海の尖りを数ふ八ヶ岳名古屋 斉藤 始子
早苗箱幾つも積まれ三反田十日町 小川 則子
浮雲の白さ映して田植待つ金沢 篠島 安子
万緑を震撼させし計報かな姫路 英賀美千代
初鯉二合五勺の酔心地高松 宇和川 厚
万物の影を持ちたる夏来る高槻 谷本 房子
薫風に託せし心託せし歩鹿児島 柳橋かすみ
一八や温泉宿は元校舎神戸 塚本 武州

吊橋の空渡りゆく夏帽子 高崎 並木 秋野
 新調の子供神輿の声弾む 天童 村形 嵩子
 ビー玉を覗けばもうひとつの夏 福岡 井上 京子
 教室の軽くなりたる更衣 静岡 小泉 荒太
 水郷の水より明けてほととぎす 大牟田 石橋 武子
 青空を深くしてゐる雲の峰 東大阪 中田 豪起
 島に生き続ける友や枇杷熟る 熊本 今福 公明
 牡丹剪るその美しき重さかな 大牟田 森永 清子
 封切らぬままの形見やパリ香水 筑紫野 宮田 良子
 布教の師雲の峰より戻らる 福岡 塚田 由美
 里に今代搔く老いの只ひとり 姫路 小林 智子
 祖父母より父母より生きて蝸牛 神戸 三木 雅子
 清貧に老いて悔いなし梅漬ける 木津川 松山 寿美
 夫の指なほ遅しく田草取 伊賀 中島 庸子
 一〇二歳笑ひ上手や春の風 根室 前田 水絵

三瓶なる裾野千里の大夏野 浜田 小池ミサエ
 暮れ泥む代田一枚茜空 倉敷 田口 壽枝
 夏服に着替へて旅の続きをり 鹿児島 手打 桃果
 峰の奥また新たななる雲の峰 北海道 安田 豆作
 滴りといふ輝きの一刹那 福山 杉原 芳子
 籐椅子や主の形残したる 東京 平野 緑
 雨匂ふ私が消えて梅雨に入る 岡山 綾野 静恵
 うとうとと媪うとうと蝶の昼 朝倉 井手ちくの
 クリークや一村なべて麦の秋 福岡 有田真理子
 草笛の風となりゆく夕野かな 福岡 工藤 友子
 まだ吾に行脚のこころ青き踏む 平戸 辻 美彌子
 万緑に染まる一步を踏み出せり 宇部 正司 道子
 半夏生風に日の斑を足して白 茨木 田邊 育子
 玄海を銀河の帯の移りゆく 神戸 田中あかね
 再会に少女のこころ風五月 長門 大谷水環子



編集後記

秋風や眼中のものの皆俳句

虚子

思い切ったもの言いでも有名な句だが、なぜ「秋風」でなければならなかったのだろうか？気温が下がり、大気が済んでくる秋、心身の感度が蘇ってくるからだろうか？

「眼中のもの」とは、目に入ってきたものというだけの意味ではないだろう。これまでさまざまなモノをみてきた経験と記憶が、試されているのだ。

○六月総会の新企画、シンポジウムの内容を、参加できなかった方々にもお届けします。稲畑汀子賞の授賞式を含め、協会の新しい姿が披露され、総合誌各誌でもこれまでに大きく取り

上げられました。

○その総合誌の広告を今号から掲載しています。会員の方々にも広く俳壇の動向を知っていただく契機になればと思います。加うるに、協会が窓口になって、総合誌に協会の作家をご紹介する方針も確認しあい、協会内と総合誌への推薦も始まっています。「花鳥諷詠」での作品発表・鑑賞記事などは、今後俳壇への通路となることもご認識ください。

○協会賞・汀子賞の応募も始まりました。協会内のみならず俳壇全体への、伝統俳句の発信の意味も込めて、奮ってご応募ください。

○関連して、次回のオンライン講座は「送りがな」や「てにをは（助詞）」をテーマとしました。賞に応募する前の、この方面での最終確認は重要です。のみならず、自選の注意点を学ぶ機会としてもお役立てくだされば幸いです。

○来年2月17日（土）、国際俳句シンポジウムを芦屋と東京で、対面・三元中継で行う予定です。（井上泰至）

●花鳥諷詠選選者予定

掲載	締切り	選者
12月号	9月20日	岩岡中正 遠藤風琴
1月号	10月20日	今橋眞理子 前北かおる
2月号	11月20日	岩岡中正 阪西敦子
3月号	12月20日	今橋眞理子 藤原哲

花鳥諷詠九月号（通巻第四二六号）

定価一、〇〇〇円 但し、本代は年会費に含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和五年九月一日

発行人 岩 岡 中 正

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シャンブル笹塚二一B一〇一

電話 〇三三四四五一九一

FAX 〇三三四四五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇七一一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一一九二